

令和7年度

文京区内大学学長懇談会

文京区アカデミー推進部アカデミー推進課

令和7年度文京区内大学学長懇談会
会議次第

日時：令和8年1月29日（木）10:26～11:53

場所：東京ドームホテル5階

小宴会場「真砂」

1 開会挨拶（文京区長）

2 報告事項

大学学長講演会実績及び区内大学と区との連携実績

3 懇談・意見交換

テーマ

『大学における生成AIの取扱とその活用について』

○アカデミー推進部長 皆様、おはようございます。

定刻前ではございますが、皆様おそろいですので、始めさせていただければと思います。

ただいまから、令和7年度「文京区内大学学長懇談会」を始めさせていただきます。

本日はお忙しいところ皆様にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

私、本日の司会進行を務めさせていただきます、アカデミー推進部長の長塚と申します。どうぞよろしくお願ひいたします。それでは、以後、着座にて進めさせていただきます。

本日の懇談会は、お手元の次第に沿って進めさせていただきます。

お手元の資料は、次第と資料1から5までございます。不備があるようでございましたら、途中でもお手を挙げていただければ、こちらで対応いたします。

では、まず、区からご報告をさせていただきます、次に意見交換となります。

本日のテーマは「大学における生成AIの取扱いとその活用について」でございます。忌憚のないご意見をいただければと思っておりますので、どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、初めに、区長の成澤よりご挨拶申し上げます。

○区長 皆様、おはようございます。区長の成澤でございます。

毎年恒例の区内大学の学長懇談会でございますが、先生方におかれましては、お忙しいところ、お時間を差し繰りいただきましてありがとうございます。本日も実りの多い議論ができますようにご協力をお願い申し上げます。

日頃から区政、各課に当たって区内大学の皆様方のお力添えにより、各大学との連携事業を進めさせていただいていること、心から感謝申し上げます。引き続きお取組いただくことをお願い申し上げます。

また、毎年申し上げますが、それぞれの大学との連携事業だけではなく、本区のふるさと納税を使って、各大学での、特にOB・OGの皆さんからのリテールの寄附を集めるということについては、ぜひ、私どものふるさと納税の制度をご活用いただくべく、相談をさせていただいております。既にお取組いただいている大学も数多くございますが、引き続き、裾野広くお使いになれると思っておりますので、活用についてご検討いただければと存じております。

本日は「大学における生成AIの取扱いとその活用について」ということでございますが、今日は津田理事・副学長がおみえですけれども、東大周辺には松尾・岩澤研究室を中心に本郷AIとあって、文京区の本郷を使っていただいて、AIインキュベーション等が数多く生まれつつあって、東大発ベンチャーがAIの分野で活躍をしているというような状況も生まれつつあります。その一方で、私どもの職員の業務効率化にもAIはつながっているのですが、中にはこのリスクも当然あるわけで、教学の面でもご苦労があらうかと思っております。

今日は、それぞれの大学におけるAIの取扱いや方向性等についてご教授いただきまして、ともに情報交換ができればと思っておりますので、限られた時間ではございますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

○アカデミー推進部長 では、ここで、本日出席しております区の職員を紹介させていただきます。

まず、副区長の佐藤でございます。

同じく、副区長の加藤でございます。

教育長の丹羽でございます。

企画政策部長、新名でございます。

企画課長の川崎でございます。

そして、アカデミー推進課長の吉本でございます。

どうぞ、よろしくお願いいたします。

それでは、次第に沿って進めさせていただきますが、その前に皆様にお願いがございます。本日の懇談会につきましては、区ホームページへの掲載等がございますので、写真撮影、また、会議録作成のための録音をさせていただきたいと存じますので、ご了承のほど、よろしくお願いいたします。なお、会議録につきましては、案の段階でお目通しいただくことを予定しております。重ねてお願い申し上げます。

それでは、アカデミー推進課長より、区と大学との連携実績等についてご報告させていただきます。

○アカデミー推進課長 アカデミー推進課長、吉本でございます。よろしくお願いいたします。着座にてご説明させていただきます。

初めに、右肩に「資料1」とあるA4縦の資料をご覧ください。

「大学学長講演会 開催実績」でございます。

今年度につきましては、令和7年11月8日土曜日に、東洋学園大学の辻中学長様に、「日本政治を『見える化』する」と題して、市民社会の角度から世界15か国を比較し、そこから見えてくる日本の政治と社会の特徴や、これからの課題を考える講演をお願いいたしまして、当日ご参加いただいた方には大変好評であったと聞いてございます。ご多用のところ、誠にありがとうございました。

続きまして、A4横の資料2をご覧ください。

「令和7年度 文京区内大学と区の連携実績」でございます。

全部で118事業が載っております。その中から新規の事業を幾つか紹介させていただきます。

下にページ数が入っていますが、おめくりいただいて、3ページをご覧ください。

ナンバー11、上から4つ目です。こちらは文化芸術の部門として、ふるさと歴史館の事業でございますが、出張パネル展示ということでシビックセンターで行います。タイトルが「近代の女子高等教育と文京」として、文京区内で女子教育を行った学校紹介や、女子高等教育の歴史を紹介いたします。こちらには4校の大学に協力していただいております。

9ページをご覧ください。一番上、ナンバー9です。こちらは、協働の部門として、町

会・自治会が実施している夏のこどもひろばとか、秋祭りに大学生のボランティアに参加していただいて、運営補助等を行っていただいております。こちらには6校の大学に協力していただいております。

次に、ページをおめくりいただいて、11ページをご覧ください。

子育ての部門でございます。下から2段目のナンバー14では、区立児童館において、お茶の水女子大学の学生による科学教室。その下、ナンバー15では、区立育成室において、中央大学の学生による科学実験教室や食育教室。

ページをおめくりいただいて、次の12ページの上から3つ目、ナンバー18では、中央大学寺社巡りサークルによる根津神社巡りや、東洋大学の学生によるけん玉イベント、東京大学クイズ研究会によるクイズ大会など、多くの大学で小学生向けイベントを開催していただいております。

次に、同じ12ページの一番下、ナンバー4のところですが、これは既に結んでおりました順天堂大学様との協定に基づき、災害時の緊急医療救護所設置のための施設使用と運営協力及び平時の訓練等を協働で実施するものです。

同じく、次の13ページの一番上段の5番のところですが、こちらは東京科学大学様と、災害時における緊急医療救護所設置に関する協定に向け、現在、協議を進めているところで、表上としては予定となっておりますが、本年3月24日に調印式を行う運びとなっております。

その2つ下のナンバー7のところをご覧ください。

こちらは、自殺対策普及啓発事業として、自殺予防につながるメッセージやイラスト、相談窓口一覧へのリンクQRコードを印字した「トイレットペーパー」や「メモ型チラシ」を作成し配布するものでございます。トイレットペーパーについては6校の大学、メモ型チラシについては15校の大学に協力いただいております。

以上、ほかにも多くの事業がございますが、一部を紹介させていただきました。改めまして、日頃から各大学の皆様におかれましては、区の事業に多大なるご理解とご協力をいただきましてありがとうございます。引き続きよろしく願いいたします。

ご説明は以上です。

○アカデミー推進部長 よろしいでしょうか。

では、引き続き意見交換に入らせていただきます。繰り返しになりますが、本日のテーマは、「大学における生成AIの取扱いとその活用について」でございます。

テーマについて大学ごとにご意見を賜りたいと存じます。その折に令和7年度の連携実績などを織り交ぜていただいても構いませんが、お時間の都合上、大変恐縮ではございますが、お1人様3分程度でお願いできればと考えております。よろしく願いいたします。

なお、東京科学大学の田中学長におかれましては、急遽公務が入られたとのことで、初めにご意見を賜り、途中退席されますことをご報告いたします。

それでは、東京科学大学学長、田中様、お願いいたします。

○東京科学大学 公務のため途中で退席いたします。大変申し訳ないと思っておりますし、残念に思っております。タイムリーな企画を考えていただきまして、本当にありがとうございます。

私たちの資料はこの1枚紙でございますけれども、この資料もAIが作ったものでありまして、私たちは、結局AIは、どんなに禁止しても学生たちは使うもの。ですから、正しい使い方ができるような学生を育てていきたいと考えております。したがって、ガイドラインを毎年見直ししておりますけれども、フリーの生成AIを学生たちで使うと情報がいろいろ流出する可能性がありますので、大学のほうでGeminiとかCopilotと契約いたしまして、大学が無料で学生・教職員に提供しております。

情報・資料などもBoxというクラウドストレージに全部上げておりまして、その意味でも、守秘に気をつけ、情報セキュリティに気をつけているところであります。特に科学大学は、医歯学系だけではなくて理工学系で特に先端技術を扱っていますので、そういう意味でも情報管理には気をつけています。

それから、いわゆるメールで学内の情報を共有すると間違っって学外に流出することがありますので、学内に閉じたコミュニケーションツールとしてSlackを使っております。

これを全部契約するのに一体幾らかかるかということが重要なことなのですけれども、約2億円を毎年払っているということでございますので、今、財政的に苦しい状況で、なかなかこれを維持するのは難しいのですけれども、リスクを考えると保険みたいなものかなと思っております。

裏を見ていただきますと、これは、私は旧医科歯科大学におりましたので、理工系と一緒にあったメリットを感じるころなのですけれども、Slackの生成AIの使い方に関するコミュニティでは、教職員が自発的にいろいろな投稿を行っています。例えば、このように使いたい、何か教えてくれと言うと、誰か詳しい人がいて、このように使えばいいんだと言ってくれる。そういうコミュニティがあって、自然と勉強していくことができるという仕組みになっております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

では、続きまして跡見学園女子大学学長、小仲様、よろしく願いいたします。

○跡見学園女子大学 小仲でございます。よろしく願いいたします。

本学の現状です。今、学生の生成AIの活用率は29%と言われております。3人に1人が使っている。おそらく、本学の学生もそれぐらいのパーセンテージで使っているのではないかと。こういう現状と、今後、急速に拡大していくであろうと想定しまして、昨年の10月に生成AIの利用ガイドラインを作成しました。内容としては、様々な大学の利用ガイドラインを参照させていただいて一般的なものになっておりますが、特に、適切に活用するための留意事項を中心に提示いたしました。

作成のきっかけは、教員からのある指摘がありまして、レポートを採点したところ存在

しない参考文献が使われており、生成AIで調べたところ出てくる。これはもう生成AIを使っているということが明らかである。こうした場合、どういう対応をしたらいいのかというお問合せがありました。そこで、急ぎガイドラインを作る必要性を感じて作ったという次第です。

AIの回答は必ずしも正確な内容にならないということ。事実と異なるハルシネーションが生じるということ。生成AIで作成したレポート・論文などをそのまま提出したとしても、学習・勉強効果が上がらないというようなこと。さらには著作権に抵触するおそれもあり、場合によっては個人情報や機密情報の流出のおそれがある。こういったことを提示いたしました。

もちろん、中には、一部ですが活用方法についても提示をいたしました。主にリスクについて注意喚起するというような内容にいたしました。

今後の課題としては、生成AI等は大学教育の在り方そのものを変える可能性のあるテクノロジーであると理解しています。したがって、これをどうやって効果的に活用して学習効果を高めていくか、それを考える必要があるだろうなと思っています。

もう一つ、多くの大学・短大様では、チャットボットなどの導入によって学生・教員へのサービス向上と、それから、一番大きいと思われるのは職員の業務の効率化に取り組んでおられ、かなりの効果が出ていると聞いております。いろいろ検索しますと、そういう実例が出ております。

本学でも、職員業務のDX化はかねてより大きな課題になっておりましたが、費用等の面でなかなか着手できないという現状にあります。そういう中で、生成AIの導入によって職員業務の効率化が、少なくとも一部でも前進できるのではないかと、改善ができるのではないかと考えております。

本学は文系の大学ですので、どうしても生成AIについて議論すると、リスクのほうに注目が行ってしまって、利用の抑制に議論が傾きがちなところがあります。しかし、これからの課題としては、ただリスクに注目するのではなく、もちろん、一方でリテラシー教育というものを並行して行わなければならないわけですが、いかに活用するか、それを検討していくこと。そして、導入に向けた検討を急ぐということが大事ではないかと考えております。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

では、続きまして、国際仏教学大学院大学学長、デレアヌ・フロリン様、お願いいたします。

○国際仏教学大学院大学 どうもありがとうございます。

大変今の時代に適したテーマを選んでいただき、本当にありがとうございます。

この生成AIの技術はそんなに歴史は長くないのですけれども、既に社会の至るところで変化が見られ、これから、それに反抗するというよりは、どうやってともに生きて最大限

活用するかということが、共通の課題かと存じております。

もちろん、今まで人類で作ってこられたほかの道具と同じように危険な面もありますが、非常に有用な、役に立つという面も非常に強く、AIに関しても、ほかの側面もそうだと思いますけれども、常に一定の倫理観、価値観の下で使わなければならないことは言うまでもないです。本大学では、まだ規程化までには至っておりませんが、これは一つの課題だと思って、近い将来、そういう規程をきちんと整備する必要があります。

本大学は、学生の数は少なくても21名でございます、大学院大学、しかも単科大学でございますので、まだ、マンツーマンという人間関係が簡単にできる環境でございます。一応、学生に調査したところでは、30%ぐらいは頻繁に使って、60%は使ったことがあります。もちろん、研究の、書いている論文のデータの修正には欠かせない道具で、教員も学生も両方使っております。

しかし、一定の論文を書き上げるということは、構成なり、また、論法の進め方が非常に重要になってまいりますので、そこはなるべく生成AIは使わないように教員も学生も注意を呼びかけております。

実は、教育の現場にも関係しておりますけれども、学習資料、教員の側も学生の側も、それは大いに活用していただきたいのですが、単位認定に関しましては、ここは厳しく、特に、学年末、期年末テストなどがございますので、それは一切AIを使わないという下で、なるべくコンピュータを使わないやり方で実施しております。

テクノロジーもまだ日が浅いということもありますけれども、仏教学の分野ではまだ十分なデータがないですし、あとは、ちょっと偏ったデータがあって、例えば、学生からそういった論文を提出されたとしても、同じAIを使ってもすぐ分かることがございますし、非常に難しい哲学的な見解が分かれるところになると、AIでも解決できないところでございます。

そういったことに注意しつつ、恐らく、今の時代の一つの、特に教師と学生の間関係は、AIの登場によるかと思っておりますけれども、ますます昔の師弟関係に戻りつつ、あるいは戻らなければならないかと思っております。

学生の提出した論文だけ、あるいは単位だけではなくて、その人の日常的な研究者の態度、その情熱も見なければなりません。それは数値化することは非常に難しいのですが、多分、先生方皆さんも、この人、本当に研究者に向いている、向いていないということは、一定の曖昧さがあるのですが、それも、これからの時代には非常にそういった基準も大事になっていくのではないかと思います。どうもありがとうございました。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

では、続きまして、順天堂大学学長、代田様、よろしくお願いたします。

○順天堂大学 順天堂の代田でございます。

私どものところでは、昨年の4月に生成AI利用ガイドラインを策定いたしまして、並行して全教職員のFD・SDをスタートしました。

まず、環境整備としては、グーグルワークスペースのGeminiとNotebookLMを利用できるようにしております。

組織体制としては、先日までAIインキュベーションセンターという、どちらかというところの研究寄りの組織をつくっておりましたが、この2月からAI推進センターを新設いたしまして、全学的な活用を統括するよういたしました。

それから、教育現場におきましては、学生に対してもGeminiとNotebookLMを利用できるように整備をしているところでございます。

ただ、教育プログラムは、各学部あるいはキャンパスごとに若干温度差がございます。生成AIだけというわけではありませんが、AIの教育としては、例えば医療看護、健康データサイエンス学部では応用基礎レベルの政府認定を受けておりますが、そのほかのところでは受けていないと、そういう差がございます。

また、学生支援につきましては、先ほどお話がありました学生支援用のチャットボットをこの3月からスタートする予定にしております。

それから、研究とか診療への具体的な導入例としては、研究支援では、研究計画書の整合性などを確認する場合の生成AIの利用。診療では、電子カルテからサマリーを自動的につくるようなシステムを導入しているところでございます。いずれも研究あるいは診療の補助ツールとしての位置づけを徹底して、安全に運用できるようにと考えております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

それでは、続きまして、中央大学学長、河合様、よろしく願いいたします。

○中央大学 河合でございます。

本日、私からは3枚ものの資料をご用意いたしました。恐縮ではございますけれども、それに沿って説明をいたしますので、お手元でご覧いただきたいと存じます。

1枚目は表紙でございます。

1枚おめくりいただきまして、まず「中央大学におけるAI・データサイエンス教育と研究の取組」についてですけれども、その資料の中央上付近にありますように、中央大学にはAI・データサイエンスに関わる学内機関といたしまして、全学連携教育機構、AI・データサイエンスセンター、教育力研究開発機構、そして、ELSIセンターに加えてIT各種ツールの運営管理を統括いたします情報環境整備センターがございます。

それらの事業の一端をご紹介しますと、教育上の事業の一例としまして、全学連携教育機構とAI・データサイエンスセンターとの連携によって、左上にお示しした、iDS (Intermediate Program for Data Science and AI) を全学対象に運営をしております。このiDSは、学部及び大学院の各組織の専門的、応用的AIデータサイエンス教育に連動してございます。

次に、AI・データサイエンスセンターは、左下にお示しいたしましたように、全学的AI・データサイエンス教育、社会との共同研究、そして、社会貢献・連携事業を3つの柱とし

まして、例えば、公認会計士とか税理士の専門家を対象とした講座なども開講してまいります。

また、右上に示しましたように、教育力研究開発機構を中心にして作成した中央大学における生成系AIについての基本的な考え方と、中央大学の教育課程における生成系AI利用上の留意事項について、2023年に既に公開いたしました。

そして、右下にお示ししましたが、ELSIセンターは、AI等の科学イノベーションと共存できる社会を創造するとともに、その科学技術の進化を社会実装するために必要な法制度や倫理観、さらには社会のありようについて追求し、社会の様々な課題解決を目指しております。

資料をおめくりください。

ここでは「高等教育の機能とAI活用の課題（私見）」を申し述べたいと存じます。

お示しのように、高等教育は、実践・研究・教育の3つの相互関係において成り立つと考えております。こうした関係性に注目いたしますと、高等教育機関においては、どの学問分野にも共通するような涵養する学生のコンピテンシーを見いだすことができます。このコンピテンシーの涵養は、恐らく普遍的な要素でございますけれども、今後はこれらの涵養にAIが積極的に活用されてくるだろうと考えております。

右上にあります、中央大学の取組との関係で見えてまいりますと、AIは、実践・研究・教育のどのシーンでも活用され得ると考えておりますけれども、特に大切と思っておりますのは、1つは活用領域（研究、教育、大学運営機能）のどこでどのようにそれを活用していくかを見極めていくこと。そして、もう一つは高等教育本来の機能、特に学生に期待するコンピテンシーの観点から活用目的を明確化して、大学を挙げてFD・SD活動を活性化することであろうと考えてございます。

なお、右下に参考としてお示しいたしましたように、AIと高等教育の関係とかその在り方につきましては、今後、他大学の好事例を集めまして検討し続ける必要性を感じているところでございます。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

それでは、筑波大学副学長理事、加藤様、よろしく願いいたします。

○筑波大学 筑波大学副学長・理事、加藤と申します。本日は永田学長が所用で出席ができませんので、私が代理で出席させていただきます。

本学は、研究に関してはAIセンターというのを持っておりまして、そこを中心に、米国Amazon、NVIDIA、ワシントン大学と包括連携契約を結んで、先端的なAI研究を進めておりますが、本日は日頃の学生並びに教職員の暮らしに根差した生成AIに関するお話をさせていただきます。

ChatGPTが世に出たのは2022年の11月です。各大学、ガイドラインを翌年ぐらいい出されていると思いますが、本学も翌年の2023年5月に、まず生成AI使用のガイドライン第1弾

を出しました。その翌年、2024年には、さらに議論を押し進めまして、これはかなり大部なのですけれども、学生向けと教員向けそれぞれ用に作成した8ページのガイドラインを作成して、公開をしております。

その趣旨とするところを説明申し上げます。学長先生方が既にいろいろとおっしゃったことと共通するような問題を私どもも抱えております。すなわち、今までは学生の相談相手というのは、友達、同級生とか先生だったのですけれども、生成AIという特別な道具が出てまいりまして、生成AIと相談してつくられたレポートなり、場合によっては、コンピュータ持ち込み可のときは試験のときに相談していいのか、そういうことが出てまいりません。

巷でよく「ググる」という表現がされますけれども、検索エンジンで世の中の沢山のことが分かるようになりました。検索エンジンが出たときもブレークスルーであったと思うのですが、生成AIが出て来て、今、私どもはその真ただ中にいます。しかも、非常に進化が速い。月単位で進化が起きて、驚くようなことが数か月単位、2か月、3か月できるようになっています。

筑波大学においても、2万人近くいる学生と、2,000人ぐらいの教員が、どうやってそれを活用していくかということが課題になっております。

私どもは、教学部門で生成AI利用を検討する委員会を設けまして、そこが作ったのが、先ほど申し上げた各8ページのガイドラインです。今後も更新が随時されていくだろうと思います。

そこで特筆すべきポイントは、各授業、教育研究分野ごとに生成AIの取り入れ方、あるいは、担当の先生の考え方は違うので、その考え方をシラバスに明記せよということです。

例えば、生成AIは一切利用禁止です、というのも一つのアプローチかと思えます。それから、全面的に使っていいのだけれども、使った箇所を必ず明記せよというのも一つのアプローチで、そのような考え方をシラバスに書いて、学生に開示して下さいということです。学生さんは、そのルールに基づいて、注意をしながら、ある意味力強く使っていただきたい。教員は生成AIの利用をどのように考えて評価するのか。学生はどのように使ったのか。お互いに開示し合って、その使い方を考えていくということが私どものスタンスになっております。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

では、続きまして、貞静学園短期大学学長、桑原様、よろしくお願いたします。

○貞静学園短期大学 本学は、保育者養成の学校で人文系ですので、先生方がご報告されたような積極的な扱いというのはされていません。

どのような使い方をしているかというのを学生に聞いてみたところ、チャッピーの愛称であるChatGPTを使ってどんなことを聞いたりするのという話をしたところ、今日の献立は何にしようとか、あるいは、一番最近多いのは、就職でA園とB園とあるのだけれど

もどっちにしたらいいかと。チャッピーがこう答えてくれたからこうすると言うのですけれども、いや、それはあなたのいろいろな条件をそこに提示しているから、結局、あなた自身の考えが返ってきているだけなんだよということを話したことがあるのですけれども、そういったアルゴリズムに関してはよく理解できていないので、チャッピーが言ったことは間違いない。これは非常に依存しているなというところがありまして、やはり道具なので、その道具を使うのも人間ですから、AIの、人工知能と言われる人工というのがどういうものかということが分かるような、いろいろな説明をしているところです。

また、一方、教員の中にも有料で使っている先生方はいらっしゃるのですけれども、結構厳しく言ってくれというリクエストを出すと、またChatGPTのほうも、より厳しく、その要求に応えるというところで、いろいろやり取りをしながら作品をつくるというようなことをやっている先生もいらっしゃるって、一つの道具をどのように使っていくかというところで考えていけばいいのかなと思っています。

あと、システムが絶対と思ってしまうと、特に保育の場面というのは人と人との関わりですから、例えば、お願いをするときに、そのシステムの中でこのようにしてくださいと言うと、そこに何か感情がないというところで誤解を生んだり、相手を怒らせてしまったりということがあるので、そういったところを気をつけながら使っていくように話しています。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

では、東邦音楽大学学長、高橋様、よろしくお願ひいたします。

○東邦音楽大学 東邦音楽大学の高橋と申します。よろしくお願ひします。

今、学長先生方のお話を聞いていて、本学が一番遅れているなと思います。音楽大学ですから、まだ師弟関係が残っていたり、あるいは、技術とか知識というものがやはりベースにないと音楽表現はできないものですから、いわゆる、先端技術を使いながら勉強していくというよりも、昭和的な、紙を使ったり、あるいは先生の指導の下に従来の勉強していくというパターンが圧倒的に多いです。

ただ、現在20%ぐらい中国からの留学生がおります。中国の留学生は、いわゆるICTに関しては習得度が非常に早くて、日本人よりも使う能力が非常に高いです。例えばレポート、あるいは4年生ですと、演奏する前に作品ノートという論文を出さなくてはいけないのですけれども、それに関するものが非常に立派なものが出てくるのです。ところが、現実的に授業で彼らと対応していますと日本語がおぼつかないのです。明らかに落差がありまして、明らかにChatGPTを使っているということが分かります。

ただ、本学は100名定員です。しかも、実技系の先生が80%を占めます。1週間に1度は必ずレッスンという形で学生たちに対応しますので、彼らがどういう能力でどういう進歩をしているかを、ある程度時系列できちんと把握することができるようになっております。ただ、先端技術を学生たちは必ず使いますので、それとのせめぎ合いで、どこまで対

人関係のところを解消していくことができるかということは、先生方と話しをしております。国際仏教学大学院大学の先生もおっしゃいましたが、いわゆる、機械を通した形での指導ではなくて、やはり顔と顔を突き合わせた形での教育というものが改めて大切なのだということを認識しながら、この新しいツールを、レポート作成なり、あるいは課題解決型の授業の中で使うということでそのよさを残していくということを今考えております。

現在作曲領域で問題になっているのは、曲制作をする時に、もちろん、作曲というのは自分の能力を感情表現として楽譜に移していくわけですが、このツールで簡単に作曲できてしまうのです。それが本物なのか、自分がつくったものなのか、あるいはパソコン上でつくったのかの見極めがなかなかできなくなっていくというのが現状です。

これは実は入試のときにも問題になります。作曲の場合には作品を提出して、そこで審査がありますので、そこをどのようにきちんと真贋を見極めていくか、入試の在り方まで、考えなくてはならない状態になっております。

先端的な技術に関しての使い方は、音楽大学ですので、まだなかなか使う状況になっておりませんが、シラバスあるいはオリエンテーションのときにガイドライン的なものをきちんと示して、セメスターごとに先生方と学生たちには毎年のように啓蒙しているという状態です。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、東京大学理事・副学長、津田様、よろしくお願ひいたします。

○東京大学 AIに関しては、教育、業務、研究に関する取組は、ほぼ他の大学様と同じですので、私は、社会への展開や社会実装について少しご紹介させていただきます。

区長のお話にもありましたように松尾・岩澤研究室というのがございまして、そこが、東京大学の学生に限らずAIに関する授業を行っており、そこは年間約2万人の受講者を受け入れています。その中の受講者の約100分の1が起業を目指し、その中の約10分の1がスタートアップを実際に起こす中で、松尾・岩澤研究室に関連したスタートアップは年間数十件あるという状況になっております。

それから、ChatGPTのような生成AIが出る前からソフトバンク社とBeyond AI 研究推進機構というAI技術を用いて、それを社会に実装しようという取り組みを行ってまして、ソフトバンク、Beyond AIから3つのCIP（技術研究組合）をつくって2つの新会社が立ち上がり、基本的には、現在は、医療画像を中心としたAI技術の社会実装の新会社ができているという状況です。

Beyond AIはソフトバンク、その他にも、グーグルと組んだ共同研究とマイクロソフトと組んだ共同研究が、現在、学内で実装中です。それから、世界に向けては、先週ダボス会議がありましたが、ダボス会議のサイドイベントとして3年前からスイス工科大学等と連携して『AI House Davos』を開催してまして、ここで世界の学長、知識人、AIの専門家、

ポリティックスに関する人、それから、経済界の人が集まって、AIに関する議論・提言というのを行って、なかなか評判がよくて、アカデミズムの中でのAIの議論というのは、そこを見ると大体のことが分かるというような状況になっているのではないかなと思います。そういうことで数件紹介させていただきました。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、お茶の水女子大学学長、佐々木様、よろしくお願ひいたします。

○お茶の水女子大学 お茶の水女子大学の佐々木でございます。

ここにいらっしゃる皆さまもほぼ同じ状況でいらっしゃると思いますが、私も自分の考えを整理したりブラッシュアップしたりすることを目的に日々AIを利用しています。学生たちの利用状況につきましては現役学生に卒業生も含めた実態調査が必要と考えています。

これまで2023年4月にメールマガジンで、ChatGPT等生成AIの利用方針について学内配信をいたしました。これは主に利用における注意事項という性質のものでした。その後AIの進歩は著しいものがありまして、他校の利用ガイドラインを見ますとメリットを強調する書きぶりとなっており、本学でも本年3月に改訂版利用方針を配信する予定で、昨年12月に新たに専門家を含むワーキングを作り、準備を進めているところです。

教員向けのFDは、2025年度にも開催しましたが、学部単位で開催しております。文系、理系では利用実態がかなり違っていますので、学部単位の利用ガイドラインの策定も必要と考えています。一方で教育においては体験をとおして批判的思考力、共感力を磨くことの必要性も説かれています。いずれにしても日々進歩するAIとともにある時代ですので、大学をあげて教育・研究においてAIを効果的に利用していきたいと考えています。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

では、続きまして、日本薬科大学学長、福井様、よろしくお願ひいたします。

○日本薬科大学 日本薬科大学の福井と申します。

新米の学長で、大学として今までAIについてどのような対応をしてきたかという細かいところまでは、把握しておりませんので、間違った情報を与えますと本当に申し訳ないと思っていますが、今回このテーマをいただいて、調べたところでは、大学全体として、AIに関わるアプローチを職員に対して、そして学生に対して何かやってきたことがあるかという、ほとんどないという答えでした。そのため、昨年11月から12月にかけて、お手元に配っていただきましたアンケート調査をやりました。

職員を対象にAIの利用状況を尋ねたのが7つ目の質問までです。教員と事務職員の30～40%が日常的にAIを使っていて、時々使っている人を含めると70%ぐらいの人が、AIを用いています。一番多いのがChatGPTということです。

6番目の質問での利用目的は情報収集、文書の作成・校正、それから、7番目の質問に対して、積極的に活用したいという職員もかなり多くおりました。

8番目の質問からは、学生についての職員の考えです。5分の1ぐらいの職員は、学生が生成AIを使用していると感じていて、ある程度そのように感じている人を含めると、半分ぐらいの職員が、学生が生成AIをレポート作成や課題の提出に用いていると思っています。

学生の生成AIの使用について問題だと思っている点としては、学習の質の低下、剽窃・盗用、思考力自体の低下、評価の公平性を確保できなくなる、倫理意識の低下などが挙げられています。

15番、16番あたりの項目では、研究、業務へも大きな影響をもたらしています。

17番目の項目では、先ほどと少し似ていますけれども、生成AIの利用で危険と思っている点として、情報漏えいと誤った情報、著作権の侵害、研究不正、学力低下などが挙げられています。

5ページ以降には、いろいろな意見が挙げられていて、全体的には全く規制しなくてもいいのではないかと、誰でも自由に使える環境だから規制は必要ないという考えの教員もおりますけれども、やはり、何かしらデメリットもあるわけですので、個人情報、著作権などの取扱いを含め、大学としてガイダンスをきっちりつくるべきだという意見が多いように思います。

今後、本日の先生方のご意見も参考にさせていただいて、大学として新たな対応をしていきたいと思っています。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

続きまして、東洋大学学長、矢口様、よろしくお願いいたします。

○東洋大学 矢口でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

3分ということで、1枚の資料を用意させていただきまして、活用の事例に絞ってご報告させていただきたいと思います。

今日ご報告させていただくのは3点で、1つは、全学の学生が使えるように「総合知アプリ」と名づけたものを去年の4月から実装しました。これは、14の学部から科目を600ほど出してもらって、全学部共通の科目として、キャンパスを超えて誰でも取れるという仕組みをつくりました。ただ、その600の中から学生が自分で選ぶというのは非常に大変なことなので、自分のやりたいことを学べばどんな将来がありますかといった、いろいろ相談相手になるAIを組み込んだアプリを実装しました。これは外部の力を借りず、本学の職員が実装しました。

学生たちに、最後は先生か先輩に相談するような仕掛けをしたので、科目選択の途中の道具として学生が認識するという意味では、これはやってよかったかなと思っており、また、これから結果を4年ぐらいかけて検証したいと思っています。

2つ目なのですが、東洋大学には情報連携学部という、INIADと呼んでいますけれども、2017年に開設した学部があります。ここは、坂村健先生を学部長にお迎えしてつく

った新しい学部でして、今は学部長を退任されて産学連携のセクションの機構長をやっていただいています。この学部の学生、1学年300人ですけれども、学部内で、MOPというマネジメントの仕組みとなるプラットフォームをつかって、教員と学生を守る体制を整えた上で、3つのAIの有料版を無制限に使えるという形にして、ずっと運用し続けています。

それは、私の中ではAIに関わる特区のような形で情報連携学部を捉えていて、大学が保障し、かつ、リスクについてもガードするように情報連携学部の全教員が運用するという形をとり、そこで得られた知見を他の学部でいろいろな課題が出てきていることに使えるところは使い、また、検証すべきところは検証する、そういう仕組みで今動かしています。

この情報連携学部での活用事例は膨大になっていますが、目指しているのは、やはり困っている人を支えられるようなものを実装できる力、それを学生が持つ。そのためにはAIをどれだけ使っても構わない。そういうものを目指す。それは、物の考え方であり哲学であり、社会にどう役立つかを考えることだという教育に徹するという約束で、この特区のようなもので進めています。

そこで、いろいろな成果が生まれ、皆さんと使えるものということで応用しまして、教職員の連絡ツールをSlackに去年入れ換えて、Slackの中にAIを入れました。教職員全員が、日常的な業務としてAIが組み込まれたSlackを使えるように、1年かけて入れ替えました。

あとは、教育活動にどう生かせるかも共有したいということで、語学教育、英語教育なのですが、その中で、情報連携学部の中でずっと実施してきた先生がなかなか面白い成果が出たということで、これをFD活動として、今度2月に、関心のある教員と非常勤の先生方に、パソコン持ってきて一緒にやりましょうということで研修をします。そのように一生懸命やって得られた成果を共有しながら、課題を一緒にみんなで検討していることをお伝えしたいと思います。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

では、続きまして、東洋学園大学学長、辻中様、よろしく願いいたします。

○東洋学園大学 毎回、ここに出ていろいろ学ばせていただいて、貢献が少ないと思っていましたので、実情だけでも調べてということで、秘書の方に頼んでアンケート調査等々をしてもらいました。でも、あまり見やすいグラフが出てきてなくて、生成AIを使えばもっと本当はうまくできたはずなのにと思ったのですが、それはともかくとして、ほかの大学と同じように、2023年には学長声明を出して簡単なガイドラインをつくりました。それから、今、松尾・岩澤研究室で働いている若手に研修をやってもらったのですが、ふと考えると、我が大学には、それをしっかり実装できるといいますか、使える人は教員では本当に数えるほどしかいないという実情で、それもあって実情をしっかりと押さえておこうということで調べていただきました。

私自身も、昨年は本を書いたりしたのですが、使えないです。生成AIを使うと何かオリジナリティが失われるのではないかと。ただ、講演を昨年4回ぐらい、ここの

文京区も含めてやりましたが、そのときには思い切って使ってみようということで、有料版の生成AIをこの1年間ずっと使ったのです。そうすると、本当にいろいろ学ぶところがありました。

そういうことで、学生さんにどんどん使え、積極的に使え、注意事項を守ってしっかり活用しようという声明を出したのですが、実際の学生さんを見てみると、たまに使うというのが半分ぐらいで、本当に活用しているかどうか微妙な数字が出ております。ただ、学問というのは問いを出す、プロンプトが非常に重要で、生成AIも相手を見てやってきますから、どんどんいい問いを出さないといい答えは返ってこないということで、そこに力を入れて今後指導していきたいと思っています。

先ほど申し上げたように、これに通じているような教員というのは本当に数名ですから、やはり人文社会科学の先生方というのは、すごくある意味では保守的といいますか、オリジナリティをしっかりと大切に、文献を自分で読んでしっかりやるというタイプの方が多いので、積極派というのは15%ぐらいしかいないということが分かりました。

それと、迷っているということです。先ほどから幾つかの大学が、しっかりしたガイドライン、数ページのものを出したと言われていましたが、やはりそういう形が必要だなと思っております。

職員は日常的に、学生さんとか教員はChatGPTを使っていた。これは、一番最初に、今、松尾・岩澤研究室で働いている人がChatGPTを中心に説明してくれたということもあるのですが、本当に、みんなチャッピーと言うぐらいすごく親しみやすく、どんどん褒めながら、使わせてくれているという形ですけれども、職員のほうは、マイクロソフトはCopilotが入っているというので、普通に調べてもどんどん生成AIが答えているわけですから、それを使っていると。職員の方は8割ぐらいがしっかり使っているということで、それなりに進みつつあるのですが、皆さんのお話を聞いていると、まだまだ効率的にうまく使っていく必要があるなと考えております。

学生さんが一番喜んでるのは、就職をするときに、自分を表現しなさいとかエントリーシートを書きなさいというときに、うまく書けなくとも幾つか自分のエピソードを入れると、もうパーフェクトなものを出してくれますから、それはそれで悪いことではないとは思っております。

そういうことで本学の課題は、最初に声明を出した後、研修もしましたが、やはりしっかりしたガイドラインを、ここにおられる大学のものを幾つか参照しながらしっかり作り続けていくということが必要だなと感じた次第であります。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

では、続きまして、日本医科大学学長、弦間様、よろしく願いいたします。

○日本医科大学 まず、私どものAI教育の状況でございますけれども、基本的には数理データサイエンス・AIの教育カリキュラムについては、リテラシーレベルプラスに選定され

て、その中では、AIリテラシー講義とプログラミング演習等を中心に作られています。

その中では、現役の臨床医で、AIを実際に作ったりしているような人たちに、活用例とか注意といったところをお願いしています。

ただ、医学部学生120人にて、この領域においては格差があり、他学の大学院生等で物理とか情報学科に所属している人たちにティーチングアシスタントをお願いして、そこのサポートなどをお願いしているところです。

実際の活用のマネジメントでありますけれども、基本的には皆様と同じようにガイドラインをつくっていて、学生向けの手引の骨子は、AI利用の明記と記録の保存を徹底することと、それからファクトチェックをしっかりすることに習慣をつけるということ、それから、個人情報、機密情報の注意です。学生には今のところは、かなり最大限注意しなければいけないという環境下でやってもらって、ガイドラインを強調しているという状況であります。

教員に対しては、評価方法としてレポート等だけではなくて、多角的な評価方法を導入するということを徹底させていただいているのと、最新のAI情報というのを学生に指導できるような、利用は自分でしていただくということをしています。

基本的には、まず、AIに相談してもらおう。そして、批判と修正というものを必ずしてもらって、その修正しているものに関してレポートを出す。やはり理工系の学部がうちにはないので、そういったところで、頑張っているところでもあります。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

では、続きまして、日本社会事業大学学長、横山様、よろしくお願ひいたします。

○日本社会事業大学 横山でございます。よろしくお願ひいたします。

両面コピー1枚を資料として用意させていただきました。

私どもの大学では、2023年7月に、公式ホームページ上で、ChatGPT等の生成系AIの利用についての基本的考え方を示しております。その後、学生の提出レポートに見られる生成系AIの利用実態等の評価をめぐって、様々な組織の中で教員間の議論が行われてきました。

さはさりながら、私どもは社会福祉系の単科大学でございます。一番人数が多い学部で、教養教育委員会が1年生を対象に「AIの使い方について」という文書で、ゼミで、そのマニュアル等を配り、徹底をしています。

そして、それを踏まえ、学部全体のFD協議会において、今の状況について意見交換を行い、日々どのような対応をしていくことが望ましいのか、今、この取扱いと活用について模索しております。

2のところでは、どのように公式ホームページで表明したのかという点は、そのこの囲みで書かれているとおりでございます。

そして、裏面に行きまして、3で記述しているとおりで、1年次教育として、教養基礎演習でAIの使い方ということを徹底しております。とりわけ、出典の真偽を調べるというこ

とと、自分の言葉で作成する、それから文責が自分にあるということを徹底しています。

そして、様々なプログラムがあるわけですが、とりわけ、情報の点から、Geminiを使用する場合、大学のアカウントで入れば、入力した事柄がAIに利用されることはないということをご通知しております。

最後に、「おわりに」でございますが、本学としては、積極的に補助ツールとして活用していくことを考えています。ただ、出典、個人情報漏えい等についてしっかりと注意を喚起することで、今後も継続的な検討を行っていくというスタンスでございます。

以上でございます。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

では、次に、日本女子大学学長、篠原様、よろしくお願いいたします。

○日本女子大学 篠原でございます。

まず、教職員は、本学独自の生成AI「JWU-GPT」を利用しています。本学が提供する生成AIのプラットフォームで、個人情報以外ですが、学内情報を検索できるようになっています。そのほか、事務局だけでは「JWU-IR」ということで、データの分析等ができるというシステムが動いています。

学生とのプロジェクトとしては、メディアセンター（本学における情報基盤の整備・運用担う組織）で「生成AIサービス学生開発ワーキング」を開催し、オリジナルのチャットボットの構築に今取り組んでいるところです。

それから、クロスサイエンスという取り組みを行っています。いろいろな学部がありますので、それらが横断的に連携することを目指したプロジェクトです。文京区との間には、災害時の妊産婦・乳児救護所提供の協定を結ばせていただいておりますけれども、そこで利用できるような、受け付けのときにいろいろな条件を入れると適切な救護所に配置されるというAIを使ったソフトを開発しておりますが、これも、理学部の数物情報科学科の教員と建築デザイン学科の教員が取り組んでいるクロスサイエンスのプロジェクトのひとつです。

また、授業関連では、AIが普及しはじめた頃に、留意事項を示す学長メッセージを出しました。総合大学としていろいろな学部がございますので、学問領域によって使い方、付き合い方が違うということで、各授業の担当者が、シラバスにAIの利用について明記することとしました。

授業科目といたしましては、「AI入門」を開講しております。2026年から幾つかの新学部を除きAI・データサイエンス・ICT教育認定プログラムの応用基礎レベルを取得いたします。教育にあたっているというところでございます。

様々な分野の人々がいるということもありますし、それから、どの段階でどのようにAIと付き合うのかというのが、多分、卒業論文レベルと博士課程前期・後期とでは異なるということもあります。人文系では、例えば、博士課程前期ぐらいだったらフランス語を全部AIに読んでもらって文献調査を行ってもよいけれども、やはり博士課程後期は自分で読

めなくてはいけないのではないかと等、レベルによる付き合い方のガイドライン、ガイドブックみたいなものを作成する必要があるかなと思っております。

私は建築デザイン学科の教員でもあるのですが、例えば、文京区、100平米、この立地、家族何人、テーマはサステナビリティと言うと、ちゃんとした図面が出てくるのです。外観もです。でも、その段階でそういうものを使ってしまうと、先ほどもおっしゃっていた自分のオリジナリティ、自分はどんなものをつくる人なのかというものを見つけることができません。一方で卒業制作や修了制作の段階の学生たちが同じような条件を言っても、これは既視感があると言って、どういうものを捨てなくてはいけないとか、自分のオリジナリティを見つける手段になる可能性もあります。年次というか、学修段階によってどう使うかというガイドラインをつくりたいと思っております。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

では、続きまして、文京学院大学学長、福井様、よろしく願いいたします。

○文京学院大学 福井でございます。よろしくお願いいたします。

本学も、2023年度に生成AIの、主に注意喚起、学生向け、教員向けの通達はしているところではございますが、明確なガイドラインなどはまだできておりません。倫理委員会などでの討議も若干曖昧な形に今のところはなっております。しかしながら、他学の先生方と同じように、本学もMDASHのリテラシーレベルは必修にしたところがございます。

実際は、先ほど出てきましたように、学生がチャッピーに相談するとか、職員の中には、議事録とか職員業務の一部のロボット化、それから、学生の募集の分析とか、学生のクラス分けにBIツールなどを使ってその一部をやってきてはおりますけれども、やはり先ほど出てきておりますように、個人のレベルが大分違うため、それほど特筆すべきことはありません。

本学の教員の業務の分担を決める際にエフォートをつくろうとしまして、AIの助けを借りたところです。

本学は、来年度からデータサイエンスの学部ができるものですから、このガイドラインについては、そちらの先生が着任した後に相談しながら進めようと思っているところがございます。

以上です。

○アカデミー推進部長 ありがとうございます。

では、続きまして、放送大学学長、岩永様、よろしく願いいたします。

○放送大学 放送大学の岩永です。よろしくお願いいたします。

放送大学は、他の大学とは教育の仕組みが大きく異なり、遠隔教育を中心としている大学でございます。学生が教員の目の前にいない環境で学習が進み、試験についても多くがIBT (Internet Based Testing) 方式による自宅受験となっているため、日常的に学生の学修状況を直接把握する機会が限られているという特徴があります。また、本学の学生は、

社会人を中心に年齢や職業、学修環境が多様となっています。加えて、仕事をしながら学んでいる方が大半です。その中には、仕事の場面でAIを日常的に利用している人も多くいて、そうした場合には、AIの利用を前提とした学修環境が成立しているのではないかと思います。

また、本学の対面授業を除くオンデマンド型の教材は定型的に制作されております。例えば、1科目に1冊の印刷教材（テキスト）、15回の授業で15章という型があり、内容は全て講師が書き下ろしで書いております。見方によっては、このような教材中心の学習の仕組み自体が「活字型のAI」のようなものと言えるのではないかと感じています。本学の教材は、講義内容を体系的に整理した知識の集積としてつくられており、学生たちは、そのテキストを参照しながら理解を深め、レポートなどを作成していきます。つまり、整理された知識体系を媒介として学習を進める仕組みとなっていて、そういう意味では、知識のデータベースを参照しながら思考を進める現在の生成AIの利用の形と、構造的に近い面があるのではないかと考えています。

こうした遠隔教育の環境や学生の学修実態を踏まえますと、生成AIの利用について単純に禁止するという対応では、実際の学習の在り方と必ずしも整合しない面がでてきてしまいます。そこで、本学では、生成AIの利用を一律に禁止するのではなく、公正性と説明可能性、業務面の安全運用を確保した上で、適切に活用する方針をとっています。

教育面では、学生に対して生成AIの利用を一律禁止とはしないで、指導教員に申し出た上で、その指導方針に従うことを基本としています。

また、このAI全盛の時代においては、勉学活動、学習活動、情報収集活動というのは、AIの利用を前提としたものになりつつあると考えていますので、既に所与のものとして、その中でどのような学習の在り方が望ましいのか、どのように学習し、どのように情報収集をしていくべきなのかについて、AIを前提とした形で学生に考える機会を提供していく必要があるのではないかと考えています。

また、放送大学の学生は、社会人を中心としており、それぞれが仕事や生活の中でこうした技術を活用する立場にあります。そのため、AIについても、適切に使いこなす利用者としての力を身に付けていくことを重視して教育を考えていく必要があると思います。

それから、研究活動については、研究倫理に基づき各教員の判断で進めることとしています。本学には「次世代教育研究開発センター」があり、そこで毎年複数の研究テーマに取り組んでいますが、その中には、生成AIの活用に関する研究も含まれています。その成果がようやく出始めているところです。

一方、教職員の業務においても、AIの活用を進めています。業務効率化の観点から、生成AIのほかRPAなどを導入し、番組制作や事務業務などに活用しています。

特に、放送大学という番組を作るという特徴があり、撮影するスタジオには大道具があるイメージをおもちださるのですけれども、今はグリーンバックのみがあり、そこにCGでつくった映像を合成して、あたかもその後ろに何かがあってそれが動いているように

見えるというデジタル技術を活用した制作方法へと変化しています。こうした技術についても、教育や業務の中で、適切に活用していくことが重要ではないかと考えています。

以上です、どうもありがとうございました。

○アカデミー推進部長 ありがとうございました。

これで、意見交換を1周させていただきました。皆様、様々な取組につきましてお話しいただきまして、ありがとうございました。

それでは、これより多少の休憩を挟みまして、懇談を兼ねての会食に移らせていただきたいと思います。会場は本会場の隣、初音にてご用意してございます。なお、お手元の配付資料につきましては、会食後、受付にてお渡しさせていただきますので、差し支えなければ、お席に置いたままでご移動いただいて結構でございます。では、ご移動をよろしくお願いいたします。